薩英戦争秘話 <1>

生麦事件の現場に最初に駆けつけた英国人医師
ウイリアム・ウイリスと鹿児島

鹿児島市維新ふるさと館
特別顧問 福田 賢治

【プロフィール】
昭和17年鹿児島市生まれ。
平成14年3月清水中学校校長を最後に定年退職。
同年4月維新ふるさと館歴史解説員、19年6月同館館長を経て24年6月から特別顧問。

今年は、文久3(1863)年7月2日に開戦した「薩英戦争」から150周年にあたります。前年の「生麦事件」が発端となった薩摩藩とイギリスとの戦争は、その後の日本の近代化に大きな影響を与えました。今回から、この「薩英戦争」の秘話を3回にわたり紹介します。

薩英戦争では英国軍艦に乗船

国道10号線沿いの鹿児島県民交流センターの敷地の一角に、ウイリアム・ウイリスのオブジェが建てられている。

イギリス人医師のウイリアム・ウイリスは、文久2(1862)年8月21日、横浜の生麦村(現鶴見区)で発生した生麦事件の際、真っ先に事件現場に駆けつけた医師であり、さらに、薩英戦争では鹿児島に来たイギリス艦隊の7隻の軍艦のうちの1隻(アーガス号)に乗船し、実際に薩英戦争を体験した人物でもある。

ウイリスは北アイルランドの出身で、ロンドンの病院に勤務していたが、生麦事件の前年に駐日イギリス公使館付医師として、弱冠25歳で横浜に赴任していた。

ウイリスが事件現場に駆けつけたときには、すでにリチャードソンは絶命していたため、その後は検死や他の二人の負傷者の治療に当たった。

検死結果によると、絶命したリチャードソンが受けた切り傷は、左肩から肋骨、腹部にかけて長さ16寸(約48センチ)あり、さらに心臓を一突きされていたとある。(薩藩海軍史)

当時、現場で島津久光の駕籠を護衛して現場を目撃した松方正義によると、リチャードソンは、久光を護衛していた野太刀自顕流(薬丸自顕流)の達人、奈良原喜左衛門によって、左肩の下から腹部にかけて斜めに斬り下げられたという。リチャードソンは、斬られた腹の傷口を左手で押さえて馬で逃げるところを、さらに鉄砲組の久木村治休によって、その左手甲の上から腹にかけて斜めに斬られ、逃げる途中に腹の臓物を落としたともいわれる。彼は約10町(約1100メートル)ほど行ったところで落馬し、後を追ってきた有村俊斎(海江田信義)に止めを刺されたのである。現在、横浜の麒麟ビール工場の正門近くの事件現場には、明治16年に建立された記念碑が建っている。(現在は、道路工事のため近くに仮移設中)

クロロホルム麻酔による切断手術を得意としたウイリスは、薩摩がイギリスと和睦したことにより薩摩との交流を始めた。鳥羽、伏見の戦いでは、京都の薩摩藩邸(現同志社大学)隣の相国寺の野戦病院で負傷兵の治療に当たり、西郷従道や大山巌をはじめ多くの兵士の命を救った。また、横浜や東北戦争などでも旧幕府軍や官軍の別を問わず、1500人以上を治療し赤十字精神を発揮した。

西郷と大久保に招かれた

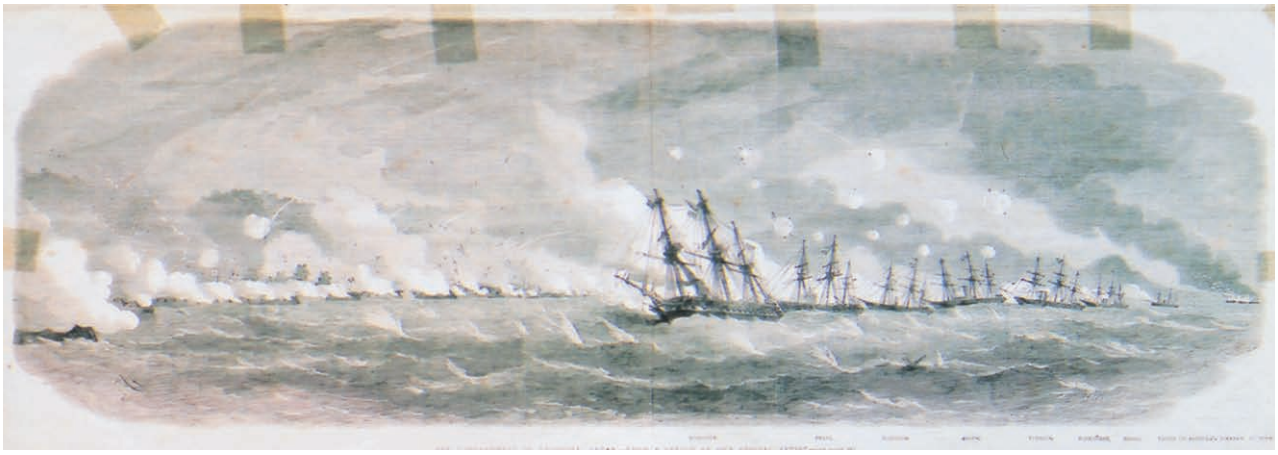
こうした功績が認められ、明治2年、東京大学医学部の前身である東京医学校兼大病院の長となるが、新政府が西洋医学をドイツ式としたことにより辞任した。そのため、ウイリスは西郷や大久保らの推薦により鹿児島へ招かれ、浄光明寺跡(現在の南洲公園)に鹿児島大学医学部の前身となる鹿児島医学校を、小川町の滑

川のほとりに赤レンガ造りの赤倉病院を設立。英国流の近代医学教育による医師の育成と多くの患者の治療に当たった。それ故、県内外から多くの医学生が集まり、鹿児島は西日本における医学の中心地となったのである。

その間、ウイリスは江夏十郎の娘八重と結婚し、愛児アルベルトを授かるが、西南戦争勃発により一家は長崎から東京へと転居。やがて家族離散の悲しい運命をたどるのであった。

生麦事件

島津久光の行列が、横浜の生麦村（現横浜市鶴見区）にさしかかった際、4人のイギリス人が馬で行列に乗り込んだため、供侍たちがイギリス人3人を殺傷した事件。イギリスは幕府や薩摩に対し、賠償金と犯人の引き渡し等を要求した。



鹿児島砲撃図（The Bombardment of Kagoshima）

［鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵］

当時の「絵入りロンドンニュース（The Illustrated London News）」が薩英戦争の様子を報じたもの

鹿児島市の観光オブジェ（時標）：「ウィリス、高木に西洋医学を説く」

［県民交流センター横］

左はウイリアム・ウイリス、右は東京慈恵会医科大学を創設した高木兼寛

赤倉病院跡

［小川町滑川］

ウイリアム・ウイリスの肖像写真

［鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵］